

## 第11回 NPO インテリジェンス研究所諜報研究会

### 陸軍中野学校の対外謀略ラジオ—史資料解説連続講座（7）

山本武利（NPO 法人インテリジェンス研究所理事長）

2015年7月11日

早稲田大学中野エクステンションセンター

#### 1、 参謀第8課の対米宣伝謀略

陸軍参謀本部の情報専管の第2部にはもともと第5課（ソ連）と第7課（支那）が重視され、第6課（欧米、南方）の担当する英米や南方の英米領、つまり英語圏の情報は軽視されていた。開戦となって泥縄的にアメリカ情報の獲得に必死となった。杉田一次課長の時代になって人員が充実してきた。「石山、牧山、阿部といった中野学校出身の米大陸やインドに民間人として潜入していた諜報要員が、現地に留まることができなくなり、引揚者とともに帰ってきて第六課に編入されてきた」（堀栄三『大本営参謀の情報戦記』）。

1937年11月から1943年10月まで、第2部には参謀本部の中で宣伝、謀略、防諜を担当する第8課が置かれていた。その任務が中野学校の目的と基本的に合致していた。中野学校を管轄するのも同課であった（藤原岩市『留魂録』）で、卒業生の多くがこの課に長期、短期に就任する者が多かった。もっと地位は高くおかしくないはずであるが、「第5課、第七課系統特に幼年学校出身のソ・独・仏系統の人材が主力であった。第8課内でも宣伝（思想）戦、防諜業務は脇役的で影が薄かった」。つまり第2部での第8課の地位は低く、おまけに課内での宣伝部門は目立たない存在であった。

1941年に着任した中野学校出身の平館勝治によれば、第8課は4班と8班に分かれていた。メディア指導、利用、世論などを使った第4班の海外謀略宣伝の担当参謀の管轄下にあった。2、3の中佐、複数の尉官が配置されていた。（長崎暢子他編『資料集インド国民軍関係者証言』）

恒石重嗣は1940年陸軍大学を卒業し、在満第12師団参謀を経て、1941年11月から第8課の宣伝担当となった。終戦時まで参謀本部部員（宣伝担当主任）兼報道部員であった。恒石は先任の藤原岩市大尉の任務を引き継いだ。もともと第8課の中でも宣伝脇役的であったという先の藤原の記憶を証左するように、恒石に関する資料、証言は同課の将校からはほとんど出ない。

しかし宣伝の分野に限定すれば、恒石は陰で謀略宣伝を冷徹に指揮する「第3の男」であった。以下の部署を総括する任務を果たしていた（恒石重嗣『心理作戦の回想、以下恒石』）。「八課で実施面で宣伝戦の舵を取ったのは、この恒石」であった。（ドウス昌代『東京ローズ』）

第8課の業務と報道部 8課と報道部員兼務 報道部長と毎週1回昼食、宣伝計画陸軍案作成

前任 桑原少佐

企画8課、実施報道部

事務所 淡路事務所（伝単作成、囑託5人）

東方社（宣伝用出版物作成、囑託15－20人）

駿河台分室（捕虜放送、囑託約30人）

別班（米国内放送傍受、少佐1、尉官2、2世囑託約200人）

このうち駿河台分室は別名駿河台研究所と内部に呼ばれていた。そこで働いていた連合軍捕虜はその研究所が文化学院の校舎にあったので、文化キャンプと呼んでいた。

## 2、「ゼロアワー」の誕生と恒石重嗣

駿河台分室がラジオ謀略を受け持っていた。開戦時のマレー作戦で投降票入りのピラがインド兵の大量の投降者を誘ったのを見て、宣伝の効力を陸軍は初めて認識した。とくに第8課西義章課長が謀略宣伝に関心を持ち、獲得した捕虜の放送での利用価値を恒石に指示した。さらに堅苦しい日本の放送形式を避けるべきとの意見も添えた（上坂『特赦』、恒石）。そこで恒石がラジオ謀略に動き出す（『昭和史の天皇』3巻）。

当時、海外放送は情報局とNHKが主体でやっていたので、これ以上、軍が表面に出ると越権になるから、ともかくNHKに身柄と、彼らにやらせる仕事を一任したわけだ（『昭和史の天皇』3巻）

その頃並河亮は情報局や日本放送協会に対し、海外放送の改善を進言していた。「外国の聴取者に『日本』をきかせるためには面白いものでなければならない」とか、「言葉と音楽のバランス」が必要だとか。（『NHK戦時海外放送』）さらには「国際放送陣日本語でも数種のDJ番組やトーク番組が導入」（同）が検討された。この情報局や日本放送協会の動きと参謀本部の要望が上手く合致したものが、新番組ゼロアワーと東京ローズの誕生につながった。つまり情報局、NHK、参謀本部合作であった（恒石）。

1942年8月、日本軍捕虜となっていた豪州軍陸軍少佐、元シドニー放送の花形キャスターCharles Cousinsと恒石は対面し、国賊との批判をおそれ渋る彼に参謀総長の厳しい命令を伝えた。NHKの満潮英雄班長も彼を口説く。こうした脅しや説得に渋々承諾したカズンズは論説下書き、原稿手直し、番組アナウンサーなどの発音訂正までも協力した。

同じく捕虜の米陸軍大尉Wallace Inceは快諾し、プログラム時間配分などで才能を出した。米比軍中尉Norman Reyesも快諾、レコード選択、原稿読みで助けた（恒石）  
一般に欧州の捕虜に比べ、米捕虜は恒石、池田によれば「この種の放送に参加することにさして心理的抵抗感がなかった」（上坂『特赦』）。

1942年4月1日にゼロアワーが始まった（『NHK 戦時海外放送』）。太平洋の島々で戦うアメリカ軍のGIの話題となった。42年11月に戸栗郁子つまり東京ローズが番組に加わった。そのハスキーボイスがアメリカ兵をさらに引きつけた。その人気者を恒石が脅迫して参加させたとの説は事実相違と恒石は否定。アイバや番組にノータッチ（恒石）。「たった1度きり」の出会い。それは激励パーティーへ彼女を招待したときだとのこと（上坂『特赦』）「恒石少佐は一切介入しなかった」、ゼロアワーに検閲なし（並河亮『もう一つの太平洋戦争』）。しかし「ゼロアワーの責任者」は恒石であった（上坂冬子『特赦』）。

番組で「孤児のアニー」と自称していたのに、半年ほどの放送を聴取するアメリカ兵が「東京ローズ」と呼びだし、それが浸透していったのは、次第に勝利を確信し、東京に近づくのが現実味を帯びてきたからであろう。かれらは無意識で彼女との同一化を求めた。それは「マダム東條」ではなく、バラ色の花の乙女でなければならなかった。（FBISの分析を参照）

\*FBIS Special ReportsNo.75,1945.6.15,Japanese Broadcasts to American Servicemen RG262E34B6

このレポートは米陸軍参謀本部 RG 3 1 9 B231A にコピー、編集されている。

将軍クラスも耳を傾けた。

このころ<東京ローズ>は、ポピュラー音楽の合間に当時の状況を敏感に反映させた宣伝をラジオで放送していた（ウェドマイヤー『第二次大戦に勝利なし』下）

ニューヨークタイムスなどでの反響はすぐに日本側に届いた。（『NHK 戦時海外放送』）。それに恒石は驚いた（恒石）。「ゼロアワーは当時の諸外国の対外放送の水準に匹敵する唯一の日本側番組」（ドウス昌代『東京ローズ』）といっても過言ではなかった。

### 3、捕虜放送「日の丸アワー」と駿河台分室

放送開始は1943年12月2日13時から始まった30分番組であった（恒石）。それが44年3月「ヒューマニティーコール」（人道の呼びかけ）と「ポストマンコール」（捕虜の家族あてメッセージ）の分けた1時間番組に編成変えた。「米国では皆楽しんで聴いている」とのアメリカ放送の反応にスタッフは喜んだ（『NHK 戦時海外放送』）。ゼロアワーの成功に気をよくした恒石がアメリカ本土の故郷向けに行った捕虜の母国への通信の形をとっていた。制作とリハーサル文化学院の駿河台分室であなされ、録音は放送会館でなされた。文化学院に捕虜2、30名が収容された。「ゼロアワー」に参加したカズンズら3人もそこに収容された。（恒石）

「ゼロアワー」がNHKと情報局に委託した太平洋の米豪軍を対象にしていたのに対し、「日の丸アワー」は参謀本部直轄の米本国向け捕虜放送であった（恒石）。

日本人制作スタッフは30名ほどであった。NHKに依存しないで独自に第8課で集めた（恒石200-1）。そのプロデューサーであった池田徳真（のりぎね）は毎日朝8時半—10時半で8課へ短波情報を入手したり、恒石に方針を聞く（『日の丸アワー』）。

連合軍捕虜は約20名であった。文化キャンプの外人捕虜 上坂『特赦』

「ゼロアワー」のカズンズのような反発があったが、多くは従った（『NHK 戦時海外放送』）。アメリカ人カルブフライシュ（『日の丸アワー』）や英人ウィリアムズの放送拒否事件があった（『日の丸アワー』）の2人が駿河台から追放され、別の捕虜収容所へ移されたが、処刑されたり、厳罰を受けることはなかった。

#### 4、陸軍中野学校出身将校の捕虜管理

捕虜の管理は中野学校出身の浜本純一、谷山樹三郎（ともに乙II長、中尉）があたった。（『陸軍中野学校』）。番組制作などに参加することはなかった。彼らは捕虜の番組制作での対応などを監視していた。ときどき従順でない捕虜を殴ることがあった。戦後の捕虜裁判で弁護側証言に出るほどである。

とくに浜本は捕虜をいじめ、暴力をふるう憲兵のような監視人として見られている。捕虜虐待による戦犯追及を避けるために、浜本が行方をくらましたとの資料もある。ただし彼が占領期に逮捕されたり、起訴されたりすることはなかったようである。

Ivan Chapman, Tokyo Calling

Russell Warren Howe, The Hunt for 'Tokyo Rose'

一方、終戦時に誠意をもってキャンプの処理にあたった一二三九兵衛少佐（乙1長）は日本人スタッフ全員から好感をもたれた者もいる（『日の丸アワー』139-140）。憲兵や下士官、衛兵約10人がいた。カズンズと憲兵とが並んだ写真が捕虜と憲兵の関係を象徴している—Ivan Chapman, Tokyo Calling

#### 5、南方軍のバンドン放送謀略—太郎良の発想、放送局乗っ取り

「専任は参謀部の将校で中野学校出身の三宅中尉ら」恒石バンドンへ放送指令を出す  
上陸前の南方軍 太郎良定夫「南方軍機密室」『週刊読売臨時増刊』 56年12月  
太郎良履歴 上坂『特赦』

特殊ラジオ放送 伊藤貞利『中野学校の秘密戦』

総員40余名のNHK職員の放送管理局 町田敬二『戦う文化部隊』

対豪、対インド、対北米放送拠点化バンドン、シンガポール、サイゴン 恒石

中野出身 三宅中尉捕虜を利用して対豪放送（恒石「東京ローズ」始末記）

#### 6、光機関のセイロン自由放送局—ボース、岩畔豪雄、リットル中佐

(ア) ボース 43年8月シンガポール夜半まで自ら放送原稿書き 恒石

(イ) 42年春インド某謀略放送の反応大 恒石

(ウ) 番組表 山本武利『特務機関の謀略』

#### 7、陸軍中野学校出身者

(ア) 中野の宣伝教育

(イ) 出身者

#### 8、日本軍の対米心理戦—英語圏への宣伝

\* 謀略、諜報以上に宣伝は中野のカリキュラムでも、出身者の活動でもマイノリティであった。指導者の宣伝経験も乏しかった。

\* この工作は戦争初期いや戦前から実践されるべきであった。少なくとも南京事件の世界世論対策でなされるべきであった。宣伝戦を忌むべき工作として軽視されていた。それが中野学校での宣伝関係科目の少なさに表われていた。宣伝理論は昭和初期から輸入されていたが、それを真剣に咀嚼しなかった。独自の理論家、実践者が誕生しなかった。

\* 最新の武器である電波の開発が独自になされなかった。

\* 宣伝の教育を謳う中野であるにもかかわらず、軍人が講師を兼ねた中野では、魅力ある宣伝の授業がなかった。その数も少なく、謀略や諜報に比べ、カリキュラムは貧弱であった。

\* 工作の中で謀略機関としての嗅覚、視覚を磨き、新たな実践を行う。

\* 宣伝は最後のあがきであった。正規戦が絶望的になった時点で、残された資源として心理戦、宣伝戦にすがらざるをえなかった。それでも一縷の望みを実現すべく、電波戦に飛びついた。

\* 恒石は電波戦の総指揮官としては、敗北必死のなかで大筋で正しく工作を実行できた。が、陸大出身のエリートにしては、彼の第8課に占める実質的地位は高くなかった。彼は体験を立派な著書にまとめた功績は大きい、死亡年月日が不明であることから分かるように、晩年はさみしかったようである。